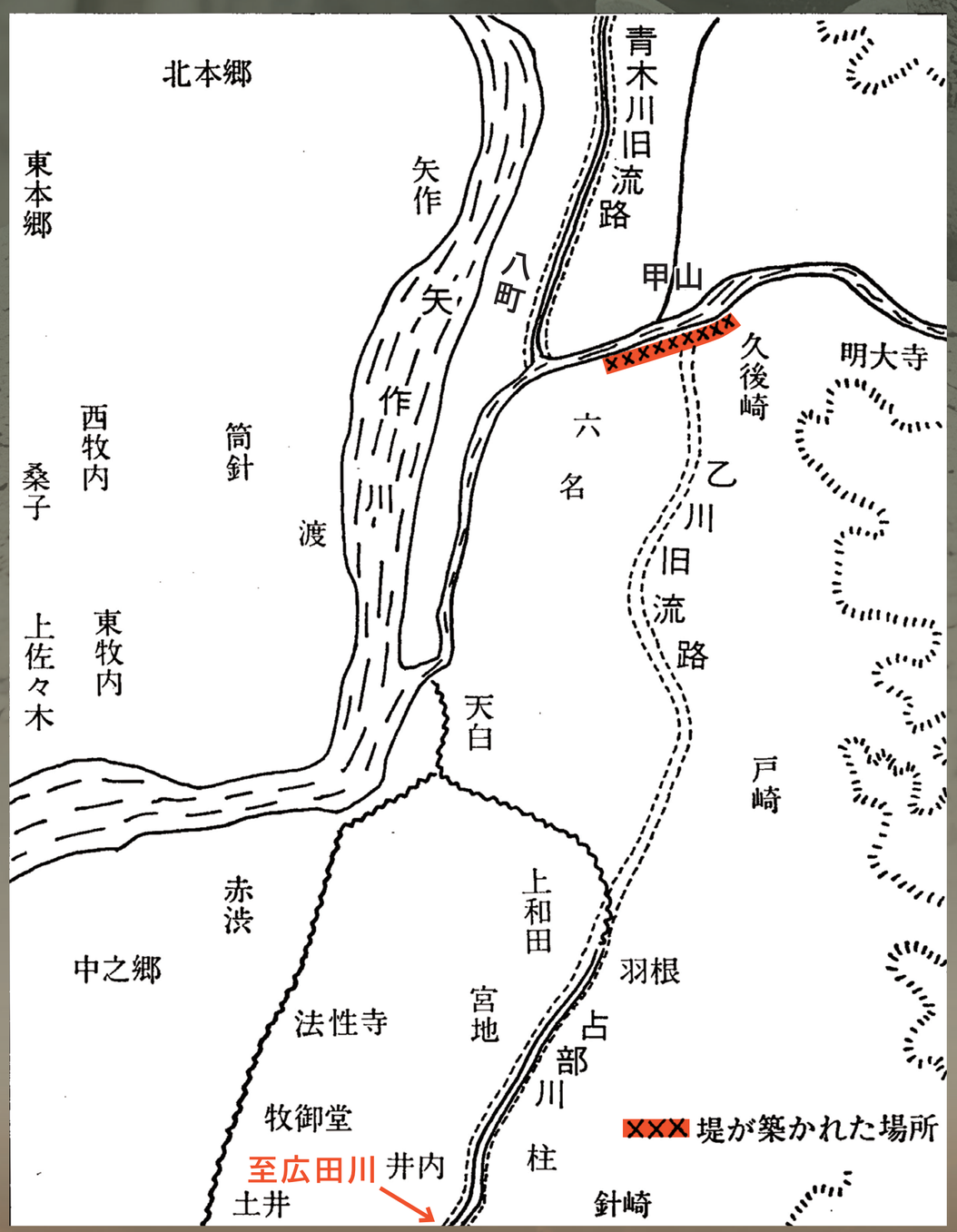
歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

SPOT スポット 1

治水事業のはじまり ～六名堤（むつなつつみ）の築堤～

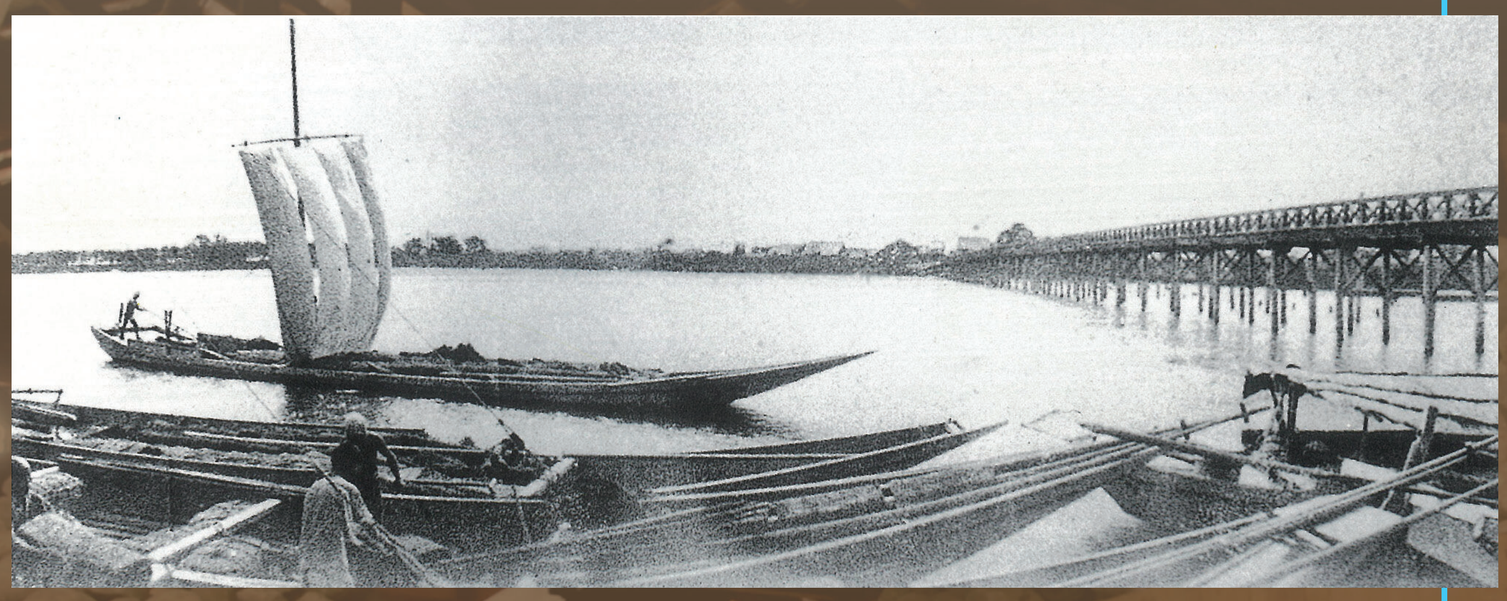


岡崎市史 2 巻 P.391 図 2-43 六名堤概念図より抜粋 一部加筆

1399 年以前、矢作川からの舟運（しゅううん）を容易にするために、台地を開削するとともに、六名堤（むつなつつみ）（後の三島堤（みしまつつみ））を築き、占部川（うらべがわ）、広田川（こうだがわ）を経由して矢作川へ流れていた乙川の流路が、矢作川へ直接流れる流路へと切り替わります。これにより、矢作川から乙川を通じて明大寺（みょうだいじ）などの川沿いの地に直接入れるようになり、矢作川の舟運（しゅううん）は更に発展をしていき、この後の岡崎市の歴史に大きな影響を与えます。そして、この六名堤（むつなつつみ）の築堤（ちくてい）が、記録上では、岡崎市における治水事業の始まりと言われており、築堤（ちくてい）を命じたのは、利害関係や支配権の構造などから将軍家の足利氏であると考えられています。

乙川の流路の付け替えにより、それまで甲山（かぶとやま）から六名（むつな）まで地続きであった台地が切り離され、北側の台地は要害として見い出され、後の岡崎城の築城につながっていきます。

矢作川の舟運（しゅううん）



矢作川 川と人の歴史 P.41 図 58 川船（写真） 岡崎市蔵

江戸時代（1603～1868年）には矢作川の流路が安定し、舟運（しゅううん）ルートが整備されてきたことにより、矢作川の左岸に位置する八町（はっちょう）（現八丁町（はっちょうちょう））周辺の八丁土場（はっちょうどば）（船着場）では矢作川下流からの上り荷で塩や大豆などが日々届けられ、こういった原料の調達が容易であったこともあり、八町（はっちょう）の地で味噌の醸造業が発展していきました。

久後崎（くごさき）（三島）切れ

1399 年以前に築堤された六名堤（むつなつつみ）は、地名の変化に伴い、久後崎（くごさき）の三島堤（みしまつつみ）と呼ばれていました。この堤防は、岡崎城の水害を防ぐため、意図的に低く造られた乗越堤（のりこしてい）と呼ばれる構造をしており、そのため、1882 年 10 月に発生した大雨により決壊し、額田郡・幡豆郡・碧海郡の 3 郡で犠牲者 43 名、浸水戸数 2000 戸の被害を出した「久後崎（くごさき）切れ」が発生しました。現在、三島堤の横には犠牲者の慰霊碑と、その後の治水対策の経過を記した三郡輪中（さんぐんわじゅう）治水碑（ちすいひ）が建てられており、当時の凄惨な出来事を後世に伝えています。



右側 三郡輪中治水碑、左側 慰霊碑

ココに注目！

歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

～乙川旧流路の現在～

六名堤（むつなつつみ）の築堤（ちくてい）により役割を終えた乙川旧流路の河川敷部分は、その後、水田化が進み、1955 年頃の高度経済成長期まで田園風景が広がっていました。更にその後は、住宅街となり、岡崎の都市化・宅地化による人口増加に対応する形で変化していきました。

乙川旧流路は元々どのように流れていたのか。また、現在はどのような形になっているのか。その一部を詳しく見てみましょう。



地形から旧流路が確認できるスポット①
段丘崖

地形から旧流路が確認できるスポット②
用水路の遺構

国土地理院 地理院地図を加工して作成